

# 仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所  
980 仙台市本町一丁目2番12号  
電話〇二二二二二一七三七七番  
編集・発行人 首藤 正義

## 青年の集い 開かる (仙台・塩釜地区)

### ― 家庭、教会、社会における問題 ―

去る5月5日から6日にかけて、第一回仙塩地区の青年の集いが開かれた。仙塩地区8教会から27人が集い、青年を取り囲む三つの場、家庭・教会・社会にどのような問題があるかを出し合い、活発な話し合いがなされた。

#### 《家庭にもっと話し合いの場を》

家庭は青年を取り囲む第一の環境である。その家庭に話し合い、対話の場が少ないという。親の単身赴任、出稼、不和がその原因を作っていることも少なくない。

その結果、親子関係が稀薄になり、家庭に暖かさがなくなっていく。そして伝わるべき価値観が伝承されず、子供は善悪の区別が自分でつけられず、家庭内暴力等の問題はその結果とも考えられる。暖かさの欠除は老人が軽んじられるということにつながるのである。

#### 《教会は信仰を深める場、外に向う存在》

教会は一致と交わりの見えるしるしとなり、外に向かうべき存在であるにもかかわらず、

現実の教会はそうようになっていない。

青年同士が互いに話し合い、信仰を深める場がなく、青年は行事等の雑用に追われてしまっている。

又、教会は全体として公会議前と後の断絶があり、小さき者が来れなくなり、他人へ心が開かれず、福音宣教をしていない。その中でキリスト者としての在り方は何なのかと、青年は問うている。

#### 《社会の問題に対する具体的行動を》

現代社会は価値観の多様化時代と言われ、現実の社会は公共的感覚の欠除、モラルの低下、もの中心で人の存在感がうすれている。他人への無関心等が氾濫している。

新聞等を開いてみると毎日のように自殺、非行、校内暴力、難民、飢餓、戦争、高齢化社会、人種差別、いじめ等の記事で満ちている。青年自身もそれらを自分たちの問題と感じ、弱者がますます隅に追いやられる現実の社会に憤りを感じている。そしてそれら社会

問題に対する具体的行動が教会に欠けていることも痛みとして受けとめている。

#### 《青年の活躍に期待》

以上、家庭、教会、社会の問題、マイナスと思われる面のみ出されたが、実はその中に話し合い、交わり、福音宣教、社会問題への具体的を取り組みへの青年の望み・期待等が表現されているのである。

今後の青年の活躍に期待した。

#### 司教様の日程

(5月29日現在)



- 6月4日 カトリック老人福祉施設協議会。
- 東北ブロック研修会(仙台)
- 5日 中央協・財務委員会(東京)
- 6日 男女修道会合同役員会(東京)
- 7日 カリタス・ジャパン(東京)
- 9日 新潟司教叙階式(新潟)
- 10日 常任司教委員会(東京)
- 13、15日 カトリック医療施設協議会。
- 総会(新潟)
- 16日 広島司教叙階式(広島)
- 17、22日 司教会議(東京)
- 23日 郡山教会堅信
- 24日 教区司祭団月例会(仙台)
- 26日 難民施設関係連絡会議(東京)
- 30日 小林司教・司祭叙階金祝(仙台)
- 7月3日 カリタス・ジャパン(東京)
- 4日 常任司教委員会、神学校常任司教委員会(東京)
- 7日 宮城県信徒大会(仙台)

アンケートの最終集計大詰め  
乞御期待

教区大会企画委員会

昨年11月から12月にかけて行なった「家庭生活と信仰についてのアンケート」に千六百通を超える回答があつたが、その集計が宮城県内各教会の協力および仙塩地区の青年達の積極的な協力のおかげで大詰めとなり、間もなく全教会にお届けできる運びとなつた。企画委では、集計表の読み方の一例を示しながらナマの数字のままの表をまずお届けし、各教会でその表から読みとつていただけること

を材料にして「家庭のあるべき姿」について話し合いを重ねてほしいと願っている。

仙台教区修道女連盟研修会

テーマ「正義と平和」

ーインドへ 友愛の手をー



さつき晴れの聖霊降臨祭の日(5月26日)、東北4県の26修道院から97名が参集して、戦災復興記念館で研修会をいたしました。

講師として、京都ノートルダム会のシスター・ジョン・シュミットをお迎えしました。

一九七七年以来、毎年インドを訪問し、美しい人々と生活を共にされたシスターは、講

私の家の前に小学校がある。朝、子供達ははしゃぎながら学校へ通い、校庭から楽しそうな声が響く。だが放課後になると、すつと静かになる。遊んでいる子供達は低学年の子ばかり、そして少ない。皆、何らかの塾に通っていると聞く。それも学習塾が多いのだという。

東京のある公立小学校 生まれ来る校六年生1クラス45名

若者の中で、何らかの塾に 子供達のために通っている子供は37名。彼らは放課後塾で別の勉強をし、帰宅すれば7時、8時になる。それから食事をし、塾のための予習をして寝るといふ毎日だそう。

私はこの話を聞いて、恐ろしいと思った。遊びを取りあげて子供に勉強ばかりさせる

親は、何を考えているのだろうか。この話は極端にしても、本当の話である。これでは勉強は出来ても、個人の獨創性は失われる一方で、体力の無い、貧弱な子供になってしまうだろう。

子供は遊びによつても学ぶものである。



だがその遊びさえ壊れつつある。パソコンゲームが流行し、外で遊ぶ子供が少なくなつて来ている。もつと子供に大自然を与えるべきである。本では得られない何にも替えがたい物が、学び取れるはずであるから。

私達青年は、やがて結婚し家庭を持つ。生まれる子供達のために、やるべき事があるのではないだろうか。(高田信一)

演とスライドを通して、現地の人々の実情と援助活動の経過を示して下さいました。「教育を通して人々が自立するのを助ける」これがシスターの援助計画の目的であり、子供たちの教育について特に強調されました。

小グループに分かれ、各自の使徒職をいかに生きるかについての話し合いもしました。3時からのクレメント師司式のミサ中、修道女方の澄んだ歌声は、余韻をひろげ、再会に希望をかけてお別れしました。(村上記)

統一教会(原理運動)にご注意!!

統一教会は、キリスト教徒と自称しておりますが、カトリック教会ではキリスト教とはみなしておりません。とくに若い青少年をいろいろな仕方でも勧誘し、正常な判断を失わせてしまつてに教育するやり方が社会的にも問題になっていきます。青少年をこのような悪幣から守るために、皆で注意しあいたいと思ひます。一度入つてしまえば、ぬけることが困難であるというのがこの運動の特徴です。かかわっている青少年がいることにお気づきになりましたら、司祭などと相談し、早急に手を打つことが肝要と思われまふ。

また、原理運動は、活動資金を生み出すのに、団体名をかくしての訪問販売、街頭募金などをさかんにやっております。彼らの運動に協力しないためにも、ご注意下さるよう、お願いいたします。(司教協議会通達)

ブラジルを訪ねて(5)

東仙台 長井 和子

9月に入つて、全ブラジル教会は断食と祈りのなかにあつた。解放の神学者レオナルド・ポフ神父がバチカン教理聖省の喚問の為にマに出頭を命ぜられたからであつた。結果は好ましいものではなく、中南米司牧現場には非常に大迷惑なものであると、マテオ・ベルディア神父はNC通信に見解を披瀝した。

この地方は数十年振り、牛が6千頭も死ぬという寒さだつた。人々は十字架を背負い、ブラジルの貧しい者の援助者アブレシダの聖母大聖堂へと巡礼の長い旅が続いた。聖ペトロ大聖堂に次ぐ大ブラジリカの両側面通路には、不正義・政治的圧迫・貧困・差別を訴えるパネルが幾百と並んでいた。はだして、又はひざで歩きつづけ、ひたすら祈り求める人々で大ブラジリカは連日埋めつくされていた。民衆の声ならぬゆめきが響き渡り、聖母マリアを通して天へと人々の熱烈な祈りはたちのぼって行く。このような熱烈で真剣な祈りのむれを、日本ではおおよそ見る事がなかつた。そして多くの人に言われた。

「長井さん、日本に帰つたら解放の神学について一番よく聞かれるでしょうネ」と。

私は今解放の神学について語るには紙面が小さくそのつもりはない。大切なのは解放の神学ではなく、「解放」そのものである。なぜなら、解放は神の業だから。心の、罪の、不正義からの、圧迫、貧困と飢えからの解放、又、解放は

兄弟愛を、一致と参加をもたらすものである。

日本において私たちがこの解放の神学について考えるというより、解放の神学が日本人に何を問いかけているのか、そしてこれが、「時のしるし」、「神の声」として、神が私に語りかけているみことばを、現実を見た者の一人として、私の出来る分野で使命を果そうと決心した。恵まれ過ぎ、いそがし過ぎる日本に住んでいると、アジア・アフリカ、中南米を含む第三世界の人々の苦しみ、又この人々を苦しめている責任が日本人一人一人にあるということを考える余裕などないだろう。しかし現に、日常生活のどれ一つをとってみてもこれらの人々の苦しみの上に成り立って平穩安楽に生きている。

今日日本も、アフリカ・アジアの人々へ目がむけられ援助の手がのばされている。フアベラの真ん中で彼らと共に生活していると大國の援助が、金持の目で貧しい人を見ている時代がまだ続いていることを知らされる。

日本人の頭で日本人の目で、日本人の感覚で現地の人を見るのではなく、「貧しい者のなかで最も貧しくなられた主イエズス・キリスト」に従い做つて、日本の教会の信者一人一人が本当に彼らと同じ位置に立つて働くその時、私たちは世界の教会の一員として神の國の建設に連なることが出来るのではないだろうか。誰かが言った。

「アジアは日本を必要としていない。日本がアジアを必要としているのだ」と。これらの声を真剣に謙遜に受け止めていきたい。

\* 神学院報告(1) 塩町教会出身パウロ宮崎

神学院のふんい気

神学院の大原則は、「本人の自覚と責任に任されている」事です。リラックスした雰囲気と同時に、自ら律する態度を持ち続けなければ6年間は無駄になると思われる程の厳しさが存在します。ここでは学生としてというより社会人として生活する事が求められています。

神学生 ↓ 神学院 ↓ 日本の教会と、問題意識が広がる自分を感じています。神学院の「リラックス」と「厳しさ」は、そのまま公會議以後の教会に当てはまるのではないでしょう。この現実を踏まえ、神学院生活・将来の教会を考えると、今の私たちに要求されている事の大きさを感じます。

2年後の福音宣教推進全国会議に向けて、「日本の教会の基本方針」について小教区で話し合いがされているようですが、基本方針の解説の中に私が今、心を止めている事があります。「キリストの霊による一致」という項目です。考えてみれば、あたりまえのように思っている教会の誕生も、使徒たちがキリストの福音を伝えに行つたのも、一か所に集まって祈っていた時、聖霊降臨の直後でした。宣教は、深い信仰の持ち主のすべき事というより、キリストの霊によつて一致した共同体から湧き出るものだと、私は考えています。そしてその共同体の中の個々が、(他人ではなく)「あなたを私を愛するか」とイエズスに問われていて、今、この瞬間でも主は答えを求めておられるような気がします。

来年秋の「教区大会」に望む

元寺小路教会 青山 龍雄

一八九一年新設の函館教区を、ローマ聖庁の許可を得、一九三一年仙台教区と改称し、司教座を元寺小路に定めてから満50年に当ることを記念して、来年秋教区大会開催が予定され、着々と準備が進められている。

全教区を挙げ一堂に会して祈るお祝い、の場を「キリストの平和の喜び」として味わい、さらに、年頭司教書簡の「キリストの平和の使徒となろう」との呼び掛けにお応えして、神のみ国到来のための「祈りと具体的な行動目標」を話し合い、実行方法まで決めるような教区大会とすることは出来ないものだろうか、その課題を次に模索して見た。

一、教勢について

司教区が置かれた函館は、一六一四年家康による禁教以来本邦初の（一八六〇年メルメ神父）礼拝堂が開かれた土地であり、教区新設の前年には大日本帝国憲法が發布され信教の自由が保証されたことでもあり、宣教の拠点として大きな期待が寄せられていたものと考えられる。

それを受けて仙台教区となった一九三六年の聖職制度は、東京に大司教区。札幌、広島が代牧区。四国、新潟、名古屋、鹿児島が知牧区。官崎が宣教区という状況下、長崎、大阪、福岡に続いて仙台が四番目の司教区となつたわけで教勢進展への希望が窺われる。

その希望も国際問題の拙劣な対応から不幸

な時代の流れの底に沈んだ一時期、そして平穩に明け暮れる現在に至る50年を顧み、託された宣教の責務を強く感ずるものである。

さて、カトリック新聞に時折り掲載される教区別の信徒世帯数を見ると、四番目に生れた仙台教区は16教区中11番目（四八〇九）、続く12番目は知牧区であつた鹿児島教区であり、しかも一県だけの世帯数であることを考えると記念大会必ずしも光輝ありとは言えず、この現実を踏まえ宣教の努力を改めて誓い合う集まりであることを第一に望みたい。

二、教区財政について

最近の司牧評議会でカテドラティクムの定率を1%値上げしたいとの教区提案が保留となつたと聞いたが、乗率を10%以上に定めている教区が多いのに当教区は8%であり、財政運営は大変であろうと常々案じておつたところである。このカテドラティクムとは、小教区から維持費と献金の合計額に定率を乗じたものを教区へ負担金として納められているものがそれで、問題は乗率よりも、そのもととなる維持費の額、言い替えれば信徒の協力度合にあるように思える。

昨年政府機関から発表のあつた昭和58年度のサラリーマン一世帯平均年収三五〇万円を基に、教会維持費を収入の1%標準として計算すると、カテドラティクムは現在より遙かに多い額となる。

従つて問題は教会維持費に帰一するわけでその納入額については、収入の3乃至5%と定め励行している教区が多く、それどころか

5%以上の納入運動を始めている教区さえあることを認識する必要がある。

マザー・テレサが来仙されたとき、「痛みを感ずる施しを」と説かれたが、維持費にも同様なことが言えるのではなからうか。「互いに重荷を担いなさい。そのようにすれば、キリストの律法を全うすることになります」（ガラテヤ6・2）。聖職者と信徒が宣教に向かつて持つていける力を補完し合うことが教会共同体の本務であり、経済面はいつにかかつて信徒の持ち分であり、主のお呼び掛けに必ずしも道でもあるはずだ。大会では是非維持費について検討する場をもつてほしい。

三、行動目標について

具体的目標について、教勢の増大と維持費増額の二案を述べたが、その達成期日をいつに定めておいたらよいのだろうか。

初代のベルリオーズ教区長は一九〇二年に聖庁から仙台定住の許可を得ておられ、仙台教区の歴史は函館に教区が新設された時から始まつたものと言ひ得ることから、教区開設百年の一九九一年（昭和66）を教区の大きな節目とし、大会後の5か年間を行動期間と定めて、「信徒一人が一人の信者を獲得する」倍増運動と、「維持費を収入の3乃至5%とする」増額運動とを、協力一致推進することを、決定できないものだろうか。

そして、これらの課題を実践することによる信徒の力の結果こそが、平和の使徒への道であり、神のみ国到来への第一歩となることを共に確認したいものである。